2003年6月13日

関 係 各 位

財団法人　社会経済生産性本部
社団法人　日本経済青年協議会

平成15年度新入社員（3,699人）の「働くことの意識」調査結果

財団法人 社会経済生産性本部（会長　牛尾治朗）と社団法人　日本経済青年協議会（代表幹事　山口修司郎）は、平成15年度新入社員を対象に実施した「働くことの意識」調査結果をとりまとめた。この新入社員の意識調査は、昭和44年度に実施して以来35回目を数え、この種の調査ではわが国で最も歴史のあるものである。

平成15年度新入社員「働くことの意識」調査の主要結果

●**就職活動で利用された情報源**は「会社説明会」（83.6%）に次いで、「インターネットの企業ホームページ」（80.3%）がランクされ、インターネットの活用が定着しつつあることが目をひく。また、この傾向は、特に四年生大卒において顕著となっている。

●**就職先の企業を選ぶ基準**では、最も多かった回答は「自分の能力、個性が活かせるから」で、全体の30.1%であった。以下「仕事がおもしろいから」（20.0%）、「技術が覚えられるから」（17.2%）など、個人の能力、技能ないし興味に関連する項目が上位を占めた。反面、勤務先の企業に関連する項目、「一流会社だから」（2.5%）、「経営者に魅力を感じて」（3.9%）、「福利厚生施設が充実しているから」（1.0%）などは10%に満たない数値であった。終身雇用制の後退を背景とする、昨今の「就社」より「就職」という傾向を反映しているものと思われる。

●**就労意識について**は、1位「仕事を通じて人間関係を広げていきたい（95.9%）」、2位「どこでも通用する専門技能を身につけたい（93.5%）」、3位「社会や人から感謝される仕事がしたい（92.5%）」がベストスリー。昨年との比較では、「いずれリストラされるのではないかと不安だ」は41.8%から39.9%に、「いずれ会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ」は29.8%から27.0%へとほぼ横ばい状況になっており、会社そのものや、雇用の安定性への信頼感が低下した状況が依然として続いていることがわかる。

● **仕事中心か生活中心か**では、「仕事と生活の両立」という回答が大多数（79.5%）を占め、「生活中心」（10.1%）、「仕事中心」（10.3%）という回答を大きく上回る。
● **学校時代への評価**では、「学校時代は楽しかった」(94.7%)「充実していた」(87.1%)と回答するのが最終学歴に関係なく高い。しかし、「学校時代の勉強が役立った」と回答する割合は65.2%にとどまる。
●**一般的な生活価値観**では、「他人にどう思われようとも、自分らしく生きたい(87.9%)」「明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていのことは達成できる（84.9%）」が上位を占め、自分らしくポジティブに生きることが志向されている。

【本件に関するお問い合わせ先】

財団法人　社会経済生産性本部〔社会労働部：高野　tel.03-3467-7252　fax.03-3467-7254〕

社団法人　日本経済青年協議会〔担当：片寄、畔津　tel.03-3469-2381　fax.03-3481-5726〕

※本調査報告書は、「生産性労働情報センター」（ｔｅｌ.03-3409-2508）より発刊。

平成15年度新入社員「働くことの意識」調査結果の概要

Ⅰ．本調査の沿革

本調査は昭和44年（1969年）以来、毎年一回、春の新入社員の入社の時期に継続的に実施されてきた。新入社員を対象とするものとしてはもちろん、就労意識をテーマとする調査として他に例を見ない長期にわたる継続的な調査である。これまで三十余年にわたり、ほぼ同一の質問項目で実施されており、非常に興味深いデータの経年変化が蓄積されてきた。しかし、昨今の、終身雇用制の後退、若い世代の価値観の変化などを背景に、時代にそぐわない質問項目が散見されるようになってきた。そこで一昨年度の実施にあたって、いくつかの質問項目を入れ替えた。もちろん、これまでの時系列データの資産的な価値を重視し、多少、最近の新入社員には無理があると思える質問も、極力残す方向でリニューアルをした。今年度はリニューアル後三回目の調査となる。

Ⅱ．調査の概要

(1)調 査 期 間 ：平成15年3月6日から同年4月30日

(2)調 査 対 象 ：平成15年度新社会人研修村（国立オリンピック記念青少年総合センター）に参加した企業の新入社員

(3)調 査 方 法 ：同研修村入所の際に各企業担当者を通じて調査票を手渡し、その場で調査対象者に回答してもらった。

(4)有効回収数 ：3.699件

(5)回答者プロフィール ：

性別		最終学歴		業種		会社規模	
男性	65.5	普通高等学校	9.3	建設	0.9	99人以下	0.7
女性	34.3	職業高等学校	4.5	製造	11.8	100～499人	12.2
不明	0.3	工業専門学校	1.2	卸小売	19.6	500～999人	27.8
		短期大学	4.2	金融保険	6.8	1000～1999人	20.7
年齢		四年制大学	65.5	不動産	0.0	2000～2999人	3.8
16歳以下	0.0	大学院	6.6	運輸通信	1.8	3000～3999人	6.6
17歳	0.2	専修・専門学校	7.8	電気ガス水道熱供給	1.2	4000～4999人	7.1
18歳	13.8	各種学校	0.4	外食産業	14.0	5000人以上	21.1
19歳	0.5	その他	0.4	情報関連サービス業	22.7	不明	0.0
20歳	8.0	不明	0.1	その他サービス業	19.9		
21歳	2.5			その他	1.4		
22歳	42.5			不明	0.0		
23歳	18.2						
24歳	8.7						
25歳以上	5.4						
不明	0.1						

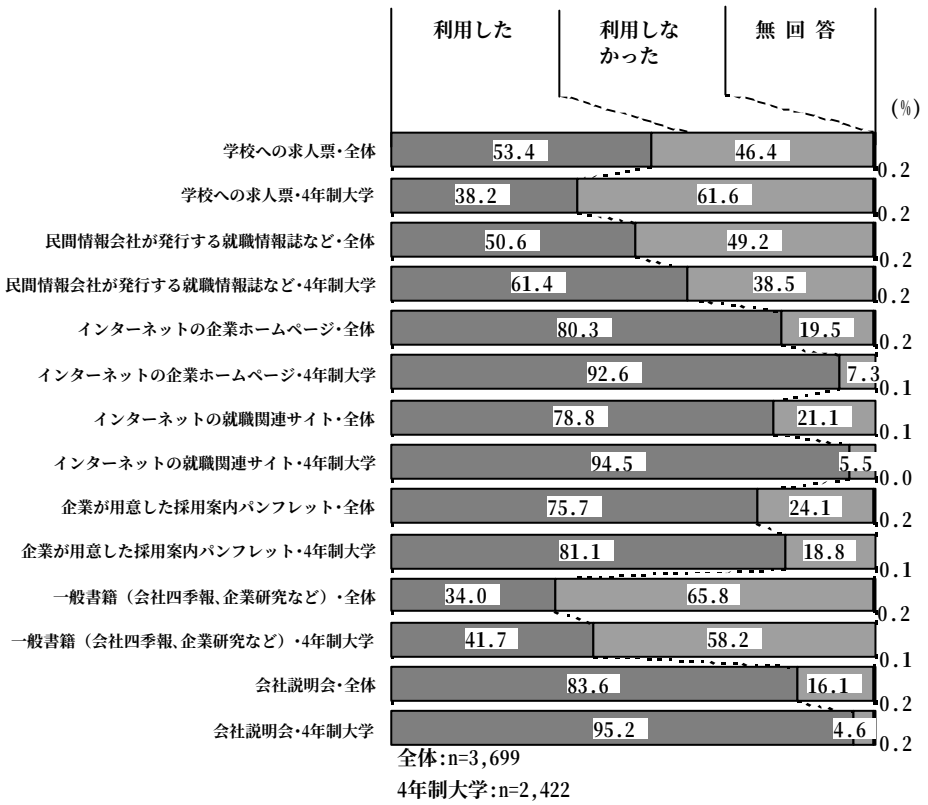
＊回答数値は小数点第２位を四捨五入している

Ⅲ. 本年度新入社員の特徴

1.就職活動の情報源――定着しつつあるインターネット情報の利用

就職先を選択するにあたって利用した情報源（Q5）は、利用度の高い順に「会社説明会」（83.6%）、「インターネットの企業ホームページ」（80.3%）、「インターネットの就職関連サイト」（78.8%）、「企業が用意した採用案内パンフレット」（75.7%）、「学校への求人票」（53.4%）、「民間情報会社が発行する就職情報誌など」（50.6%）、「一般書籍（会社四季報、企業研究など）」（34.0%）となる。会社説明会、パンフレットなどが今も上位にランクされるが、インターネットがそれに続く位置を占めている。四年制大学卒は、企業ホームページについては92.6%が、就職関連サイトについては 94.5%が利用しており、四年制大卒の就職にあってはインターネット情報の重要性が非常に高くなっている。インターネットの利用はほぼ定着した感があり、昨年と比較しても、全体の利用度でも「インターネットの企業ホームページ」が 76.6%から 80.3%へ、「インターネットの就職関連サイト」が 74.7%から 78.8%へ、四年制大卒にあっては、「企業ホームページ」が 93.0%から 92.6%へ、「就職関連サイト」が 94.7%から 94.5%へとほぼ横ばい状態となった。

就職活動の情報源（Q．5）

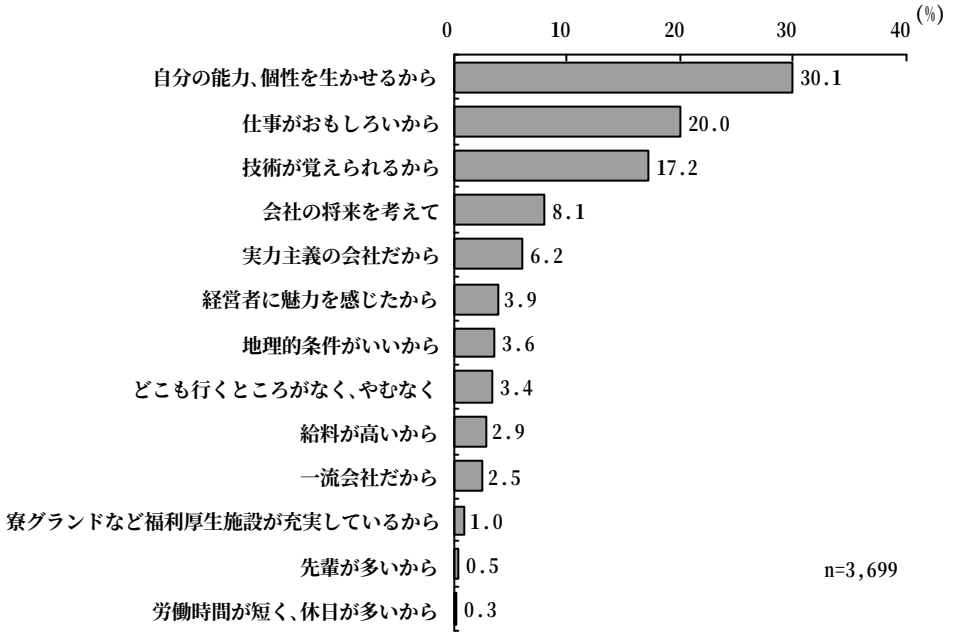


2.会社の選択基準――「就社」から「就職」へ。能力・個性を重視した会社選び

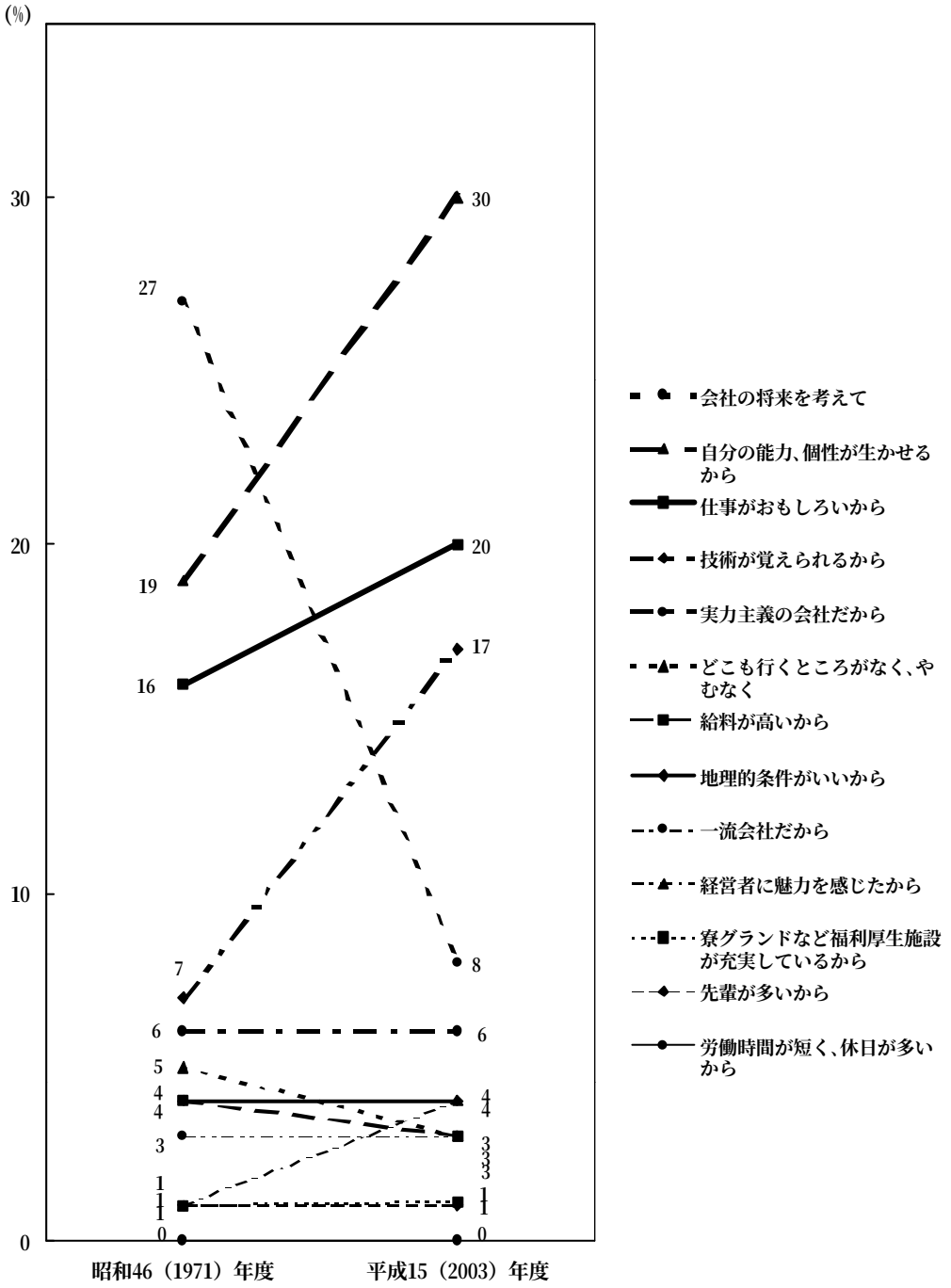
「会社を選ぶとき、あなたはどういう要因をもっとも重視しましたか」（Q1）という質問に対して、最も多かった回答は「自分の能力、個性が活かせるから」で、全体の 30.1%であった。以下「仕事がおもしろいから」（20.0%）、「技術が覚えられるから」（17.2%）が上位を占めた。このような個人の能力、技能ないし興味に関連する項目に比べて、勤務先の企業に関連する項目、「一流会社だから」（2.5%）、「経営者に魅力を感じて」（3.9%）、「福利厚生施設が充実しているから」（1.0%）などは 10%に満たない数値であった。終身雇用制の後退を背景とする、昨今の「就社」より「就職」という傾向を反映しているものと思われる。

会社選択の要因（Q1）の経年変化で興味深いのは、昭和 46 年度には 27%でトップに挙げられていた「会社の将来性」が、一ケタ台の 8%にまで落ち込んでいるということである。代わりに「自分の個性・能力が生かせる」「仕事がおもしろい」「技術が覚えられる」（それぞれ 30%、20%、17%）の３つはいずれも増加傾向にあり、まさに“寄らば大樹”的な思考が廃れ、自らの技能や能力が問われる時代へと変化してきたことを物語っている。

会社の選択理由（Q．1）



会社の選択理由（経年変化）（Q．1）



3．就労意識――職場の人間関係への大きな期待

就労意識について 13 の質問文をあげ、「そう思う」から「そう思わない」まで四段階で聞いてみた（Q11）ところ、肯定的な反応の回答（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）の比率は以下のような順になった。

就労意識のランキング（Q．１１）　　各項目の（）内の数字は調査項目の質問番号

1 位　仕事を通じて人間関係を広げていきたい(7)【95.9%】
2 位　どこでも通用する専門技能を身につけたい(3)【93.5%】
3 位　社会や人から感謝される仕事がしたい(13)【92.5%】
4 位　これからの時代は終身雇用ではないので、会社に甘える生活はできない(12)【91.7%】
5 位　高い役職につくために、少々の苦労はしても頑張る(9)【79.9%】
6 位　仕事を生きがいとしたい(1)【72.3%】
7 位　面白い仕事であれば、収入が少なくても構わない(2)【61.6%】
8 位　仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる(6)【57.9%】
9 位　いずれリストラされるのではないかと不安だ(4)【39.9%】
10 位　職場の上司、同僚が残業していても、自分の仕事が終わったら帰る(11)【34.2%】
11 位　仕事はお金を稼ぐための手段であって、面白いものではない(8)【27.8%】
12 位　いずれ会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ(5)【27.0%】
13 位　職場の同僚、上司、部下などとは勤務時間以外はつきあいたくない(10)【20.9%】

総じてポジティブで積極的な項目が上位を占める傾向があり、反対に、ネガティブで消極的な項目が下位を占める。職場の人間関係にドライな若い世代が多いというイメージがあるが、この結果を見る限り、新入社員たちは職場の人間関係に大きな期待をもっている。また、ここでも専門技能への関心が確認され、これからの職業生活において、個人の専門技能をよりどころとしていきたいとする意向が伺える。

昨年との比較では、「いずれリストラされるのではないかと不安だ」が 41.8%から 39.9%に、「いずれ会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ」が 29.8%から 27.0%へとほぼ横ばい状況になっており、会社そのものや、雇用の安定性への信頼感が低下した状況が依然として続いていることがわかる。

4．仕事中心か生活中心か――バランス志向

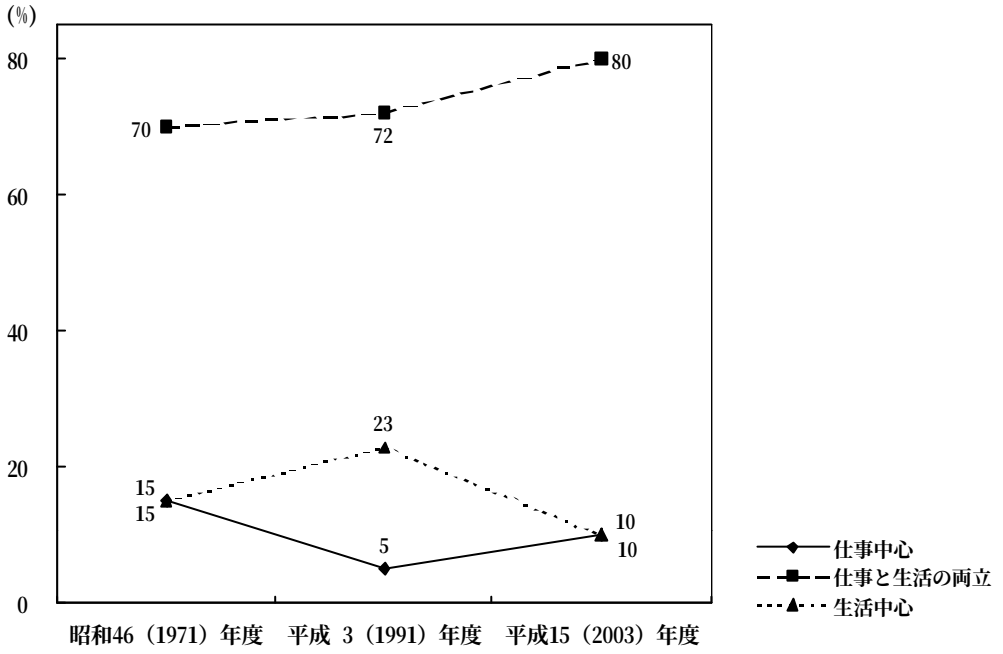
「あなたは仕事と生活について、どちらを中心に考えますか」（Q6）という質問に対しては、「仕事と生活の両立」という回答が大多数（79.5%）を占め、「生活中心」（10.1%）、「仕事中心」（10.3%）という回答を大きく上回る。

この項目の経年変化を見ると、「両立」派が大多数であることに変わりはないが（約 80%）、「生活中心」派はバブル期をピークに年々減少し始め、逆に「仕事中心」派はバブル期をボトム

に増加しつつある（それぞれ、昭和 46 年度 15%→平成 3 年度 23%→今年度 10%、昭和 46 年度 15%→平成 3 年度 5%→今年度 10%）。こうしたバブル期新入社員の“お気楽志向”とも呼べる傾向は、仕事に対する意識のひとつの特徴である。

働く目的（Q7）については、前年度と同じく「楽しい生活をしたい」がトップに挙げられ、一昨年度トップであった「経済的に豊かな生活を送りたい」は３位に後退している（それぞれ、平成 13 年度 35%→平成 14 年度 35 %→今年度 34%、平成 13 年度 22%→平成 14 年度 21%→今年度 23%）。

仕事と生活のバランス（経年変化）（Q．６）

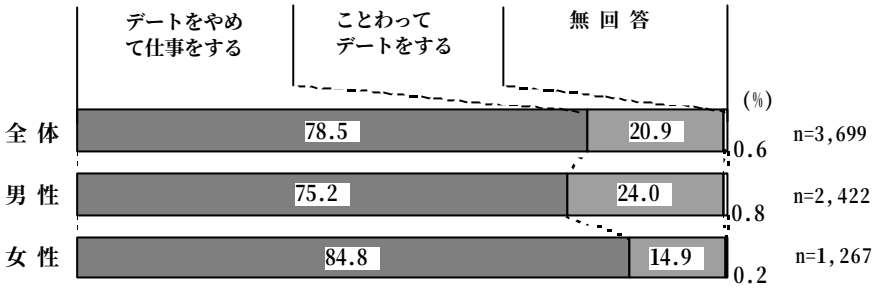


5．デートか残業か――プライベートより仕事を優先

「デートの約束があった時、残業を命じられたら、あなたはどうしますか」（Q15）という質問に対しては、「デートをやめて仕事をする」（78.5%）、「（残業を）ことわってデートをする」（20.9%）と、プライベートな生活よりも仕事を優先する意向が伺える。男女別に見ると、「デートをやめて仕事をする」という回答は男性 75.2%に対して、女性 84.8%と女性のほうが上回っている。

この項目の経年変化についても前項で見たのと同様の傾向がある。「（残業を）ことわってデートをする」はバブル期がピークであり、「デートをやめて仕事をする」はバブル期がボトムである（それぞれ、昭和 47 年度 30%→平成 3 年度 37%→今年度 21%、昭和 47 年度 69%→平成 3 年度 62%→今年度 79%）。

デートと残業（Q．１５）



6．職場で一番「生きがい」を感じるとき――重視される「充実感」

「あなたは職場でどんなときに一番“生きがい”を感じますか」（Q10）について 12 種の選択肢をあげて聞いたところ、最も多かったのは、「仕事がおもしろいと感じるとき」（28.2%）で、男女別に見ると、男性 25.6%に対して、女性が 33.2%とやや上回っている。他に多かったのは、「自分の仕事を達成したとき」（22.2%）、「自分が進歩向上していると感じるとき」（17.8%）、「自分の仕事が重要だと認められたとき」（11.9%）などであり、これに対して「会社に将来性があると感じる時」（0.1%）、「賃金、福利厚生施設、作業環境等が良い時」（0.5%）、「昇進する時」（1.3%）などが下位を占める。「自分自身の充実感」といったキーワードが浮かんでくる。

7．学校時代の評価――とどまる勉強内容の有用性

本年限りの質問項目として学校時代に関する満足度を聞いたところ、「学校時代は楽しかったか」（Q33-1）という質問に対して「はい」と回答したものは全体の 94.7%、同様に「学校時代は充実していたか」（Q33-2）に対しては 87.1%であった。この割合について、最終学歴による偏差は小さく、学校時代への満足度が学歴達成の程度とあまり関係せず、全般的に高いということがわかる。しかし「学校時代の勉強は役に立ちましたか」（Q33-3）という質問になると、「はい」と回答したものは全体の 65.2%にとどまる。

8．生活価値観――“自分らしさ”を大切に

一般的な生活価値観について 16 の質問をした。おおむね、積極性を示す項目が上位を占め、消極性を示す項目が下位を占めた。一位となったのは「他人にどう思われようとも、自分らしく生きたい」（23）で、「自分らしい生き方」というものに強い関心を示している。最下位だったのは「周囲の人と違うことはあまりしたくない」（8）で、一位の「自分らしさの追求」と対をなす結果になっているが、現実には、強い同調圧力にさらされ、周囲から浮いてしまうことに強い警戒感をもつ若い世代が目立つことを考えると、一種の努力目標としての回答と考えたほうがいいかも知れない。

重視する生活価値観（Q．３０）　　各項目の（）内の数字は調査項目の質問番号

1 位　他人にどう思われようとも、自分らしく生きたい(23)【87.9%】
2 位　人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめをつけるのは大切なことだ(14)【85.4%】
3 位　明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていのことは達成できる(13)【84.9%】
4 位　将来の幸福のために、今は我慢が必要だ(22)【80.8%】
5 位　すこし無理だと思われるくらいの目標をたてた方ががんばれる(12)【77.0%】
6 位　あまり収入がよくなくても、やり甲斐のある仕事がしたい(16)【71.8%】
7 位　自分はいい時代に生まれたと思う(20)【71.2%】
8 位　企業は経済的な利益よりも、環境保全を優先するべきだ(17)【66.7%】
9 位　世の中、なにはともあれ目立ったほうが得だ(10)【57.4%】
10 位　たとえ経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らすほうがいい(15)【57.3%】
11 位　冒険をして大きな失敗をするよりも、堅実な生き方をするほうがいい(21)【49.5%】
12 位　自分と意見のあわない人とは、あまりつきあいたくない(9)【48.0%】
13 位　世の中は、いろいろな面で、今よりも昔のほうがよかった(19)【46.6%】
14 位　世の中は、いろいろな面で今よりもよくなっていくだろう(18)【41.0%】
15 位　リーダーになって苦労するよりは、人にしたがっている方が気楽でいい(11)【38.4%】
16 位　周囲の人と違うことはあまりしたくない(8)【30.6%】